

特別な性格をもつ単元のねらいを生かして

漢字の力を身につけよう

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の

三領域の力を伸ばす漢字の学習

教科書各学年共通
漢字の学習175



④ 語句の意味に応じて使用する漢字がわかり、

a (漢字変換時などに) 正しい漢字を選べる。

b (手書きの場合に) 漢字を正確に書ける。

⑤ 話す場合と書く場合の違いや、伝えたいことを効果的に表現する工夫として使用する語句を選べる。

漢字の力は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域の言語活動に欠かせない。これらの言語活動の能力を伸ばすことを目的に、漢字の力を身につけていきたい。

「学習指導要領解説」には、漢字を読む能力に関して、「(漢字を) 語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことができるようにすることが求められる。」とある。つまり、漢字が「読める」ということは、言葉の意味を知り、使い方で理解しているということである。

裏返せば、自らが「話す」ときや「書く」ときに、語句としての漢字をどう使うか判断できる力も漢字の力ということになるだろう。例えば、ワープロで漢字変換をするときに正しい漢字を選べる力、また、同じ漢字を使うときでも、漢語か和語か、はたまた別の語句に言い換えて使うべきかを、「聞き手」や「読み手」を意識して選べることも身につけてほしい力であろう。

一 基本的な考え方

● 学習のとらえ方

教科書の単元末に設定された「漢字の学習」のページは、テーマが絞られ、解説に練習問題もついている。

学習者にとって、問題演習が中心の授業は、内容や手順がはつきりしていて「受けやすい」授業といえるかもしれない。しかし、授業時間だけで、新しく習った漢字を身につけて使いこなせるようにするには、おのずと限界があるだろう。学んだ漢字を自在に使いこなせるような力を身につけるためには、やはり学習者が漢字に触れ、学習する機会を自主的にもたなければならぬ。

そのため、「漢字の学習」を取り上げる時間は、学習者が授業そのものに関心をもって取り組めるように工夫することに加えて、家庭学習での取り組み方も示せるような組み立てが望ましいのではないだろうか。

● この学習で身につけさせたい力

「読む」「聞く」学習の中では、

① 漢字で書かれた語句が読める(単純な読み)。

② 漢字語句の意味と用法を理解できる。

③ 話を聞くときは、話の流れから語句の意味を理解し、その語句の表記のしかたがわかる。

「書く」「話す」学習の中では、

二 観点別評価の進め方

● 基本的な評価方法

漢字の力は、どう身についたかを具体的に確認することが重要な評価の材料になる。例えば、三年「漢字の学習1」形に着目して漢字を考える」の言語事項に関する評価の基準は、「教材文の漢字について、国語辞典と漢和辞典を使い分けて調べ、その結果を身につけている。」とある。評価方法としては「観察(辞典の使い方・ノートへの記録内容)」が示されている。多くの授業者は、これにテストなどを利用して、前記「身につけたい漢字の力」の①、②や④bの力を測定しているだろう。

● 目標に合わせた授業時間の入れ替え

右のような基本的な評価方法に加えて、同じく前記の③、④a、⑤の力も評価できる機会をつくっていききたい。

そこで、「漢字の学習」で学んだことを実際の言語活動に生かす場として、三領域にかかわる学習の中で評価していくことが考えられる。そのために、教科書の単元末に置かれた「漢字の学習」をほかの学習材を扱う前に予習的に学習しておくのもよいだろう。

〈例1〉「話すこと・聞くこと」での評価

例えば、三年第二単元で「話す・聞く」の学習材である「わたしたちの伝統文化」わかりやすい紹介のしかた

を工夫する」の前に、「漢字の学習2 漢字の音訓」を扱う。
ここで漢字の音訓と漢語・和語の関係についての関心や理解を深め、時期を置かず、今度は学習者が自分で話すための原稿作りで言葉選びを工夫していく。留意するのは、話し言葉では漢語を不用意に使うと意味がわかりにくくなるので、和語で言い換えたほうがよい場合があるということなどである。

この活動を通して前記の⑤の力を評価したり、ほかの生徒の発表を聞くことから同じく③の力を評価できる。

＜例2＞「書くこと」での評価

例えば、一年の「漢字の学習3 漢字の読み方」、二年の「漢字の学習1 漢字を分解して考える」、三年の「漢字の学習3 漢字の意味」は、「書くこと」の学習の前に扱っておく。また、三年の「漢字の学習3」の場合でいえば、練習問題2「似た意味の熟語 や5、6「正しい用字」を学習し、語句の意味に応じて漢字を使い分ける機会が日常的にも多いことを学習者に意識づける。続いて作文を書く際、自分が使いたい言葉をどう表記するかを意識的に調べていく。昨今は漢字がわからないと安易に平仮名で書いてしまう学習者も見受けられる。自分の書いた文章が読み手に効果的に伝わるように語句の表記にも気を配っていききたい。また、コンピュータ

た項目語の類語として載せられた言葉を利用するということができる。

●グループ学習での学び合い

これらの活動を行うときは、グループ学習を取り入れるのもよいだろう。グループ学習は、班員がお互いに知識を補い合ったり作業の分担をしたりできる。

ある漢字がわからない、漢和辞典をうまく引けないなどの問題は、各グループ内で同時に解決できる。「意味調べ」のときには、調べる語句をグループ内で分担することもできる。分担された語句を各自が調べ終わったところで発表し合い、ワークシートを完成させる。

このような学び合いの環境づくりは、限られた時間の活用に加えて、学習者の関心を高める効果もあるだろう。

●評価について

以上の活動では、グループの活動状況やワークシートの記入内容などがポイントになるだろう。

「言語事項」については、学習者が短文や言い換え言葉をどう工夫したかなどを評価する。

また、個々の「関心・意欲・態度」を高めるためにも、しっかりと学び合いの雰囲気をつくっていききたい。

（ワープロ）を用いて作文を書いてみると、漢字変換を通して正しい漢字を選ぶ学習が実践的にできる。この活動では、前記の④aの力を評価できる。

三 指導と評価の計画例

●「漢字の学習」で行いたい学習活動

教科書の「漢字の学習」を扱う際に、共通して行いたい活動がいくつかある。

＜例1＞「意味調べ」と「短文作り」

取り立てて漢字を学習する際には、漢字を語句としてとらえて身につけていくために、意味を理解する時間を確保したい。習慣づけるために、家庭学習の課題としてもよいだろう。

また、「短文作り」は「意味調べ」と同様新しい取り組みではないが、語句の用法を身につける練習として継続的に行いたい活動である。時間があまりないときは、辞書に載っている用例文を写すのもよいだろう。

＜例2＞「言い換え言葉探し」

例えば、教材文中の漢語を和語に、またその反対に和語を漢語にしてみたり、意味の似た別の言葉に置き換えてみるという活動である。

「意味調べ」のときに辞書の説明を活用したり、調べ

四 この学習のポイントとなること

漢字を知ることとは言葉を知ることであり、言葉をたくさん身につけることは、「伝え合う力」を養うことであるということ。子どもたちに意識づけていきたい。漢字の力を身につけることは、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域の力を伸ばすためのエネルギーとなる。

こうした視点から、教科書の「漢字の学習」も、ほかの領域の学習とのかかわりを積極的に模索しながら授業に取り入れていけるとよいのではないだろうか。